

「歴史に学び、明日につなぐ 美・技・心」 伝統文化の継承と伝統産業の将来

2016/11/26(土)14:45~17:00 於 京都市立芸術大学

司会:

佐藤 敬二(伝統産業論・工芸デザイン 京都精華大学 デザイン学部 教授)

パネリスト:

野口 穂高 (伝統産業振興施策 京都市産業観光局 伝統産業課長)

阿部 富士子 (造形作家、扇研究家)

大藪 泰 (漆工工学 漆素材の研究と産業化 京都市産業技術研究所研究フェロー)

金谷 勉 (商品企画プロデューサー CEMENT 代表取締役 京都精華大学非常勤講師)

近藤 太一 (桶屋 近藤 木工)

山中 純平 (清課堂七代目山中源兵衛 錫工芸 / 金属工芸 工芸画廊)

シンポジウム趣旨伝統的工芸品産業の課題として下記のような諸課題がある。1. 良質な自然素材の入手が困難または枯渇の恐れ2. 加工する品質の良い道具の作り手が高齢化、優秀な後継者の育成が必要3. 人材が少ない(素材研究、技能と経営研究、現場密着のデザイン研究、三位一体の連携)4. 伝統的工芸品を活かせる生活空間の減少、職人技を振るうべき場が無い(流通・消費の場)

伝統産業についてはその作品や製品には完成までに、自然素材とそれらの特性を生かした加工をする多くの工程があり、多彩な道具が必要となり多くの人手を経る。

品質の良い素材、優れた道具、優秀な技を持った職人、その三者が相まって初めて作り手の心や気遣い、ライフスタイルを超越する愛情が感じられ、技術的に素晴らしく次世代に残したいと思う工芸が生まれる。そこで伝統産業の従事者が考えなければならないのは「作り手」と「使い手」の関係の重要性である。

ものづくりの心、すなわち使う人への気遣いや次の工程をになう職人への気遣い、使う道具への気遣い、ものづくりの手の感覚、身体感覚、生きている自然素材の大切さ、世代間を超えた人と人の繋がりなどが必要となる。

先人の知恵と自然の英知に謙虚に学ぶこと、優秀な技を途絶えさせないこと、デザイン・図案は頭と同時に手で考えること、現代の用途に合った最高のものづくり、貴重な自然材料を良い形で、自己満足でなく使う人に届くよう努力することなど、それぞれの工房・企業にとっての「手技に対する思い」が重要である。

和風の暮らし、伝統の技について理解し、洋風の暮らしにも合うもの作り、その現代における意義を考え次の世代に何を引き継ぐのか?経営者や職人、工芸作家、生活文化の担い手、工芸材料の専門家などパネリストと一緒に考え、現代のライフスタイル、伝統文化、意匠と材料・技術について考える。

モノづくりの現場と行政機関、公設試験研究機関や大学との連携協力のあり方について、また様々な立場から今後の生活文化のあり方や伝統工芸、伝統産業の可能性、方向性をこのシンポジウムを通して見出したい。

(京都精華大学 デザイン学部教授 佐藤 敬二)